

モット、ウサギ、ハムスターなどにして、珍しい輸入動物は飼わないことが重要である。また同様に健康管理されていない野生動物についても、どんなに「かわいそだから引き取って」と頼まれても、「学校獣医師から禁じられている」と断るのがトラブルを招かないと思う。

また特にげつ歯類の動物は人への病気を持っていると心配されているネズミの仲間である。獣医師の助言により、実験動物業者などから病気のない個体を導入し野生のネズミと接触させない飼うこと。

①鳥インフルエンザ：これは鳥にとって高病原性の病気であって、人にうつる病気ではない。たとえば猫エイズや犬ジスティンパーが人に感染しないように、ウイルスが動物の種類を越えてうつることはめったにない（例外：狂犬病など）。犠牲者がでている東南アジアの国々では、養鶏が人の暮らしの中で行われ、また生きた鶏を売買する習慣があり、生活の場で病原を大量に吸い込んだり、口に入れたなど、高濃度の病原を吸い込んだと考えられている。病原は腸内容・糞に出るが、あの国々の犠牲者は殆ど、糞が舞い上がるような状態の養鶏家か生鶏の販売所の人、あるいは病鶏と知らずにさばいて食べた人といわれている。火を通した肉を食べても感染したのではなく、料理の際にどのように腸内容を扱ったとか、手やまな板を良く洗ったり消毒したかが重要だったろう。日本では食鳥検査が確立されており、病気の鳥は肉にもならず、また腸内容などもはずされて売買されるので、あの国々とは条件が違う。昨年の騒ぎに際し、国は最初から最後まで学校の対応について、「良く掃除をして、鳥を観察して様子のおかしいのは獣医師に相談すること。掃除の後は子どもたちにうがいと手洗いをさせること」とだけ指示しており、だれも学校の鳥たちを危険だと思っていなかつた。ただ、農水省が国内の養鶏を守るためにしたあの防護服での消毒処置を、あまりに知識のないままマスコミが報道したため、あたかも鳥から人にうつるよう誤解を招いたと言える。この報道は本来科学部が行い、不安を納めるようにすべきだったと思う。

なお、日本ではこの病気の鶏はすぐ死ぬので、今元気ならそれは感染していないと言える。元気な鳥を隔離することは、あなたが「いつかインフルエンザにかかるからと、隔離される」状態に等しい。なお人の流行性感冒では毎年肺炎（多くは60歳以上）や脳炎・痙攣（子ども）で二千人近くの死者が出るため学級閉鎖される。この意味でも鳥インフルエンザは全く問題

視されていない。

なお、この病気が野鳥から鶏に感染するとの説があるため、監視体制時期に私たちは飼鳥を守るため、野鳥と接触させないように、また鳥小屋の外にあるかも知れない野鳥の糞を靴で持ち込まないようにと、「鶏を小屋から出さず、人は靴裏を消毒してから飼育小屋に入るよう」にと指導した。

なお、このウイルスは体外（死んだ鳥や排出物の中）で10日ほど（冬は40日くらい）しか感染力を保てない。また環境省の野鳥調査で、日本ではこのウイルスを持つ鳥は確認されていない。現在のようにウイルスが国内にない場合は、鶏飼育も以下のように普通の飼育で十分である。また再度どこかで発生しても、インフルエンザウイルスは比較的弱いため、万が一の感染は掃除とうがい手洗いで防げる。ただし、上の監視体制時期の飼い方にすること。また30キロ圏内の養鶏場などで発生したときは、地域の家畜保健衛生所などの指示に従うこと。すべて学校獣医師に相談すると良いだろう。

普通の飼育：普段から動物の健康を守ってあげる気持ちと処置が、人の健康も守り子どもの人格形成を助ける。

- ・動物を観察しながら、体力を落とさないように朝夕の2回の餌・水やりを行う。（休日は、ホームステイ、親子当番、親子ボランティアなど保護者の協力を得る）
 - ・子どもたちとの接触で、動物を疲れさせない。（お触り抱っこは連続15分以内）
 - ・暑さ寒さに注意する。（冬は木製の巣箱を入れて、夏は大木の木陰に避暑）
 - ・糞をそのままにしないで、毎日すっかり取り去る（多頭飼育は掃除が大変）。
 - ・糞が粉になって舞い上がるほど汚れている時は、マスクをして掃除する。
 - ・小屋の床を週に1回くらい水洗いができると良いが、土の場合はできないのでよく掃除して乾燥させる。年に1回程度表土30センチくらい新しい土と換えると良い。
 - ・掃除を終えたら、手洗い・うがいをする。（外遊びから屋内に入ると、手洗いうがいは通常の衛生習慣）
 - ・動物が元気がないなど、様子がおかしい時は直ぐに獣医師に受診させる。
 - ・次に警戒宣言ができるまで、安心して鶏を庭で散歩させてかまわない。
- なお、自分の手が土などで汚れているときは、洗ってから動物に触ること。特に海外から帰国

した人は、靴や服を替え手洗いをしてから国内の鳥や人・動物にさわるくらいに、日本に病気を持ち込まない気持ちが必要だろう。また動物に与える水は飲料水を使い、池の水や川の水を使わないこと。

8 アレルギー

世界的にアレルギーの少ないのは、発展途上国や家畜農場の子、兄弟の多い子と定説があるが、日本でも清潔すぎる環境は、アレルギーを減少させることにならないといわれ、最近は回虫を体内に寄生させる方がアレルギーを引き起こさないなどの説も出ている。

また、近年、乳幼児期に毛のある動物を飼っている家庭の子は、アトピーになっても喘息になる率は動物を飼っていない家庭の子より明らかに少ない。それも複数の動物を飼っていたほうが少ないと、スウェーデンやアメリカの小児科の医師などが発表している。

①アレルギーへの一般的な注意事項（医師の助言のもと記述する）

- ・動物をたくさん飼わずに換気と掃除を良くすること。
- ・1歳までの乳児には、動物との接触は手のひらの部分にとどめる。
- ・1歳以上の子どもも、皮膚が薄い顔に動物をつけたりするのは、なるべく避ける。
- ・動物の傍に行くとクシャミをしたり、目が痒くなる子どもには接触させない方が良い。でも触りたいときはマスクをさせて、様子を見ながら手のひらだけで触わらせる。動物の毛がついている手で顔や腕の皮膚を触らないように注意して、事後に手を洗わせること。

実際の対応：多くの園や学校ではこのような反応のある子どもには、水替えや餌を持ってくるなどの外回りの仕事を頼んでいる。また、目のふちも赤くならないのに親が不安がる場合は、長袖の上着とマスクをつけさせて世話をさせたり、厚い布でくるんだ動物を膝に置いて抱かせる感覚を楽しませているが、多くは自然に子どもが被いをかけていくようだ。また痒みなど反応がでた場合、上着を着替えるか粘着テープで洋服についた動物の毛を除き、顔・手洗い、うがい、などして反応が治まっていくか様子を見る。多くは15分くらいで治まっている。

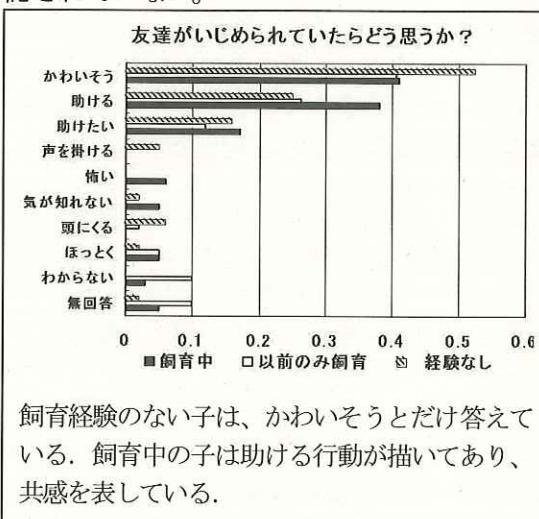
②直ぐに医者に駆けつける注意すべき反応（アナフィラキシー）

めったにないことだが、アナフィラキシーも症状を知っておく必要がある。様々な物質と接觸したり吸い込んだり食べた後「呼吸がひゅう

ひゅう言う。青い顔で元気がなくなる。顔が腫れる。吐く。意識を失う」など、何等かの反応が起こる。原因物質は食べ物、化学物質、芳香剤などいろいろあるが、原因物質に接触してから数分から30分位（多くは10数分）までに急に、青くなったり尋常ではない反応が起つたら、親への連絡がつかなくても、直ぐに医師に連絡して駆けること。

この反応をハムスターに何度も咬まれた後に起こす事例が、1997年以降日本で20例くらい報告されてるので忘れないこと。ハムスターと言っても、現在種類が確認されている事例はすべてジャンガリアンなどの小型種で、原因物質はその唾液など体液である。

ハムスターは急に手を出すと驚いて咬むことがあるので、予防には、抱くときは優しく手にすくい上げるなど、おっとり育てて噛まれないようにすること。特にアレルギー体质の人で、そのハムスターと同じ部屋にいると咳きなどができる場合は、部屋を別にするなどの注意が必要だろう。少し大きなゴールデンハムスターでも同じ様に咬まれないように触るが、この種類の性格は小型よりおっとりしている。また、咬まれてアナフィラキシーをおこした事例は確認されていない。



9 獣医師の支援

① 校獣医師の活動目的

①「子どもが動物に情を感じる飼育」を実現するよう、助言・支援する。子どもたちが「世話は面倒だけど 可愛いからほって置けない」と感じるほど情をつなぐ事ができれば、困難に対し色々工夫することができるなど、教育的効果が生じる。

②人と動物にとって心地よい環境管理法を伝える。

獣医師の専門である環境衛生、食品衛生の知

識を元に、必要な衛生維持法を伝えるが、管理は予算やそのほかを考えながら学校が実施することである。

③結果、学校が飼育のことで、社会からそしりを受けないように助言・支援することになる。

(2) 獣医師の支援活動の内容

①相談窓口：学校の相談にのる

何か相談事が生じたとき、いつでも学校からの相談をうける。ただ、教員には授業時間、獣医師には診療があり時間があわないことが多い、連絡にはFAX・メールなどを使うのが便利のようである。なお、学校が動物をつれて来院するときは、前もってお互いの都合の良い時間を打ち合わせるようにする。

②飼育指導

・講習会：連携初年度は、教員や管理者（校長など）に講習会を行う。大体は自主参加なので、関心のない学校は参加しないが、すべての学校から参加してもらい毎年行うと効果的である。飼育の意義、現状の課題、改善方法、動物介在教育のための飼育方法、子どもと動物の関係などを話す。できれば講義の後、教師に動物を接触させて、動物への感性を養い接觸方法を伝えると良い。飼育方法を説明するより飼育の良い実例をしめし、また動物の実体験をさせると良い。百聞は一見にしかず、百見は一触にしかずである。

・定期訪問：定期的な学校訪問活動を行い、飼育現場を見ながら校長、教頭、担当教師と交流し、飼育意義、より簡単な飼育法、衛生環境改善などを、雑談を交えて伝える。

なお飼育環境や方法を改善するのは学校であって、獣医師は良い方法を示し、助言するにとどめる。信頼関係ができればお互い本音で話し合えるようになる。

③飼育支援の連絡会議・・・支援活動の成果や次年度の活動方法などを、教育委員会、校長会、獣医師会、時にPTAなどと協議する会を設ける。

（以上3点が必要最低限の活動内容だが、学校の希望により授業支援も行う所が多い。）

④授業支援：学校の希望により、獣医師の知識と技術をもって授業に寄与する。

10 最後に

動物飼育が子どもに良い影響を与えるために以下のことを大事にしていただけたらと思う。

- 可愛がってこそ子どもの心に命の大切さ、愛情、他への共感を伝える。
- 可愛がっている子どもにとって、動物は我

が子と同じような存在である。

- 愛情飼育と食農教育を混同しない。子どもが情をかけている動物を大人が殺してはならない。
- 動物を大事にするということは、子どもの心を大事にすることである。
- 生まれては死ぬに任せている飼育は、子ども達を死に鈍感にさせてしまう。
- 弱い存在の動物が困っているときに、大人が何の助けも示さないのは、子どもに無力感をもたせる。
- 弱い動物を心配する子どもの心を大事にすることで、愛情と責任を教えることができる。
- 子どもの大事にしている動物を大事に扱うことによって大人は敬愛される。
- 世話を手間がかりすぎる飼育はさせない。ちょっとの手間でたっぷりのふれあいをもてるようにして、楽しい体験にさせる。

大学生に飼育に関して授業をすることがあるが、大学の保育科の学生達に「動物飼育の実習」で、チャボを膝に抱かせたところ、

「最初は突付かれると怖かったけど、抱いているうちにどうしたらこのチャボが安心するだろうかと、自然に体の動きを工夫している自分に気がついた。この思いやりの感情は子どもにもわくはず」「班に分かれて動物を抱いてた時、今まで話が合わずに敬遠していた人とも自然に笑って話あっていた」「自分は動物を触ると痒くなるけど、今まで動物とこのように触れたあつた覚えがない。もっと小さい時にこのような体験をしていたらきっと違った自分がいるはず」などの感想が見られた。中には、「可愛いいい」といいながらもチャボを抱いている体がカチカチになり、「小さい時から動物は汚いかから触ってはいけないと、親にいわれ続けてきた」と、緊張から大粒の涙をこぼす学生もあった。

また園児と園の動物とのふれあい教室で怖がったチャボが羽をパタつかせた時、指導者が不用意に悲鳴をあげたのを見て、抱く順番を待っていた子がチャボを抱けなくなり、友達が目の前で次々にチャボを抱いているのを最後までじっと見ていた事例もある。

大人のしぐさや言葉が、一生その子を縛る可能性を考え、子どもの世界を広げ豊かな体験を与えるようにすることが大事だと思うが、動物のことでは、親御さんや先生などの指導者が慣れていないなら獣医師の助けを得て、動物と子

どもを交流させてもらえるようお願いする次第である。

獣医師との付き合いについて、地方獣医師会の中には、まだ良く理解していないところが見られるが、日本獣医師会が全面的に支援しているので、先生がたとしては臆せずに支援を受けたいと申し出ていただきたい。

なお、獣医師は普段から動物の状態を把握している飼い主の相談にのり、投薬などを指示し、殆どの飼い主にそれを守ってもらっている。しかし、学校の動物は諸般の事情で、日常の様子も不明で投薬もままならない方が連れてくることが多いため、そのことに獣医師は驚き傷つくことがある。それでつい、先生方に不満を言うことがあるかもしれないが、驚かずに大目で見ていただければと思う。現在そのことについて獣医師に学校の事情への理解を広めるよう努めているが、まだ周知が徹底されていない地方もあるため、ご不快をおかけした場合は当方にご連絡をいただきたい。

また、獣医師が学校に関わって努力している地域では、「獣医師は結局金銭が欲しいのだ」という批判が行政から漏れてくることがある。が、金銭的収入を考えたら、病院を留守にしたくないのが開業獣医師の本音である。開業獣医師にとって病院を留守にすることが一番辛いということを理解していただきたい。その上で、今学校に係わっている獣医師たちは、自分の子どもを通して、親の気持ちで学校に関わっているのである。

なお、動物病院を留守にしたくないため、学校に関わろうとしない獣医師も多い。その場合も当方に知らせてくださいれば、地域の仲間の獣医師と調整してカバーできるように対応にしたい。

(2003)「学校飼育動物と生命尊重の指導」鳩貝太郎・中川美穂子共同編著 教育開発研究所

(2000)「学校飼育動物のすべて」中川美穂子監修執筆、ファームプレス中川美穂子

(2087)「動物とこども」フレーベル館山崎恵子

(2001)「Reratio」vol. 8、チクサン出版、横山章光(1996)「アニマルセラピーって何だ?」NHK出版 I. Robinson(2007)「人と動物の関係学」編集山崎恵子訳、インターナー

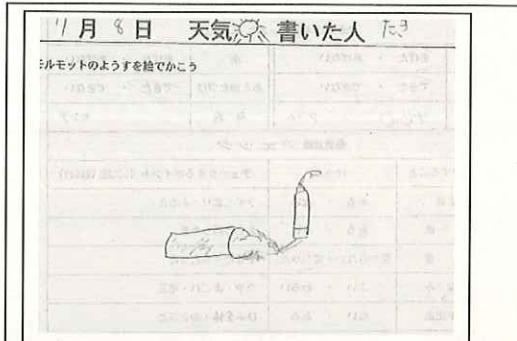
*自治体と獣医師会との連携事業については54ページ参照のこと

(FAX 0422-56-9086)

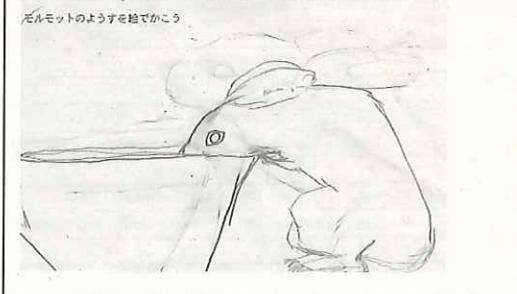
学級内のモルモットを描いた絵の経時的な変化（4年生） 筑波大付属森田学級

参考資料：

1、A君の飼った当初と3ヶ月半後の絵

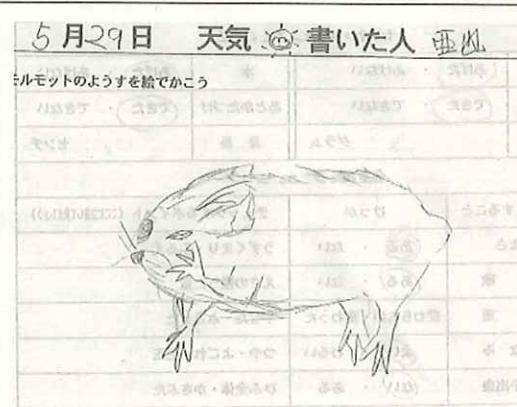


10月 8日 天気 晴 書いた人 A君



10月 21日 天気 晴 書いた人 A君

2、Bさんの飼い始めと、4月後の絵



5月 29日 天気 晴 書いた人 B君



9月 30日 天気 晴 書いた人 B君